

忠五郎のはなし

昔、江戸小石川に鈴木と云ふ旗本があつて、屋敷は江戸川の岸、中の橋に近い所にあつた。この鈴木の家來に忠五郎と云ふ足輕がゐた。容貌の立派な、大層愛想のいい、伶俐な若者で、同僚の受けも甚だよかつた。

忠五郎は鈴木に仕へてから數年になるが、何等非難の打ち所のない程身持もよかつた。しかし遂に外の足輕は、忠五郎が毎夜、庭から抜け出して明方少し前までいつもうちにゐない事を發見した。初めは、この妙な舉動に對して誰も何にも云はなかつた。その外出のために日常の務めに故障を來す事がなかつたのと、又それは何かの戀愛事件であるらしかつたからであつた。しかし暫らくして、彼は蒼白く衰へて來たので、同僚は何か重大な間違でも起らぬやうに、干渉する事にした。そこで或晩忠五郎が丁度家を抜け出さうとする時、一人の年取つた侍が彼をわきへ呼んで云つた、

『忠五郎殿、御身が毎晩、出かけて、明方までうちに居られない事は、我々皆知つて居る。それから見たところ顔色もよくない。どうも御身は悪友と交つて健康を害して居るのではないか。その行に相當の辯解ができないとこの事を役頭まで届けて出なければならぬ。何れにしても我々

は御身の同僚で又友人であるから、御身がこの家の掟に反して夜分外出なさる理由を承るのが正當ぢや』

さう云はれて忠五郎は大層當惑し、又驚愕したらしかつた。暫くは黙つてゐたが、やがて、彼は庭に出た、同僚もそのあとに續いて出た。二人が外の人に聞かれない所まで來たとき忠五郎は止つて云つた。

『もう一切申します、しかしどうか内密にして置いて下さい。もし私の云ふ事を洩されると、一大不幸が私の身にふりかかります。』

『五ヶ月程前の事です。私がこの戀のために始めて夜外出したのは、ことしの春の初めの事でした。或晩私は、両親を訪れて屋敷へ歸らうとする途中、表門から遠くない川岸に婦人が一人立つて居るのを見ました。みなりは上流の人のやうでした。それで私はそんな立派な装ひの婦人がこんな時刻に一人そこに立つて居るのが變だと思ひました。しかし私はそんな事をその婦人に尋ねる理由はないと思ひましたので、何も云はずにわきを通らうと致しますと、その婦人は前へ出て私の袖を引きました。見ると大層若い綺麗な人でした。「あの橋まで私と一緒に歩いて下さいませんか、あなたに申上げる事があります」と女は云ひました。その聲は大層柔かな氣もちのよい聲でした、それから物を云ふ時、につこりしました。そのにつこりには勝てませんでした。そこで私も一緒に橋の方へ歩きました。その途中女は私が屋敷へ出入するのをこれまで度々見てゐて好きになつたと云ひます。「私はあなたを夫に持ちたい、あなたは私が嫌ひでなければお互

に幸福になれます」と云ひました。何と答へてよいか分らなかつたが、大層綺麗な女だと思ひました。橋に近づくと女は又私の袖を引いて堤を下りて川の丁度ふちまで連れて行きました。「一緒にいらつしやい」さうささやいて川の方へ私を引きました。御承知の通りあそこは深い所です。それで俄に女がこはくなつて引きかへさうと致しました。女はにつこりして私の手頸を握つて「私と一緒にならこはくはありません」と云ひました。どうしたわけか、その女の手にはさはられると私は赤ん坊よりも意氣地なくなりました。夢の中で走らうとしても手も足も動かさない時のやうな氣が致しました。女は深い水の中へ踏み込んで、一緒に私を引き込みました。それから何も見えも聞えも感じもしなかつたが、氣がついて見ると大層明るい大きな御殿らしい所を女とやらんで歩いてゐました。濡れてもゐなければ寒くもありません。周圍のものは一切乾いて暖く綺麗でした。私はどこへどうして來たのだから分りません。女は私の手を引きながら案内して部屋から部屋へと通りぬけて行きました。——その部屋の數の多い事は限りがない程で、それがみな空でした、しかし非常に立派でした。——最後に千疊敷の客間に參りました。向うの床の間の前に灯がともつてゐて、宴會のやうに座蒲團が並べてあつたが、客は見えない。女は私を床の間の上座に案内して、自分はその前に坐つて云ひました、「これが私の家です、ここで私と幸福に暮らされると思ひませんか」から尋ねながらにつこりしました。私はこのにつこりが全世界の何よりも綺麗だと思ひました。それで心から「ええ……」と答へました。同時に私は浦島の話を想ひ出してこれは神女かも知れないと思ひましたが、こはくて何も聞かれませんでした。……やがて女

中達が入つて来て、酒肴を私共の前に置きました。それから私の前に坐つた女は、「私がおいやではないなら、今晚婚禮の式を擧げませう、これが結婚の御馳走です」と云ひました。七生までの誓をして、宴會の後、用意の部屋へ案内されました。

『私を起してくれたのは朝未だ早い頃でした、その時女は「あなたはもう私の夫です。しかし今私から云はれない、あなたも聞いてはならない理由があつて、この結婚を祕密にして置く事が必要です。夜明まであなたをここに置いては二人とも生命が危くなりませう。それで御願ですか、御主人の屋敷へあなたを送りかへしても機嫌を悪くしないで下さい。今夜又、それから、これから毎晩、始めてお遇ひしたあの時刻にお出でになつて下さい。いつでも橋のわきで私を待つてゐて下さい、長くはお待ちせしませんから、しかし何よりもよく覚えてゐて下さい、この結婚は祕密ですよ、それからもしこの事を人に話したら、もう永久に別れなければならなくなりますよ』

『私は何事も女の云ふ通りにする約束をしました——浦島の運命を想ひ出しながら、——それから女は誰もゐない綺麗な部屋を澤山通りぬけて、入口まで私を案内しました。そこで私の手頸を取ると、又一切のものが不意に暗くなつて覚えがなくなつたが、氣が付くと中の橋の近くの川岸に獨りで立つてゐました。屋敷へ歸りましたが未だ寺の鐘が鳴り出しませんでした。

『夕方女の云つた時刻に又橋のところへ参りますと女が待つてゐました。前のやうに私を深い水の中へ、それから婚禮の晩をすごした不思議な所へ連れて行きました。それから毎晩、同じ様に

その女と會つては別れました。今晚も必ず私を待つてゐます、女に失望させるよりは一層死にたいのですから私は行かねばなりません。……しかし御願です、私が今申し上げた事は誰にも決して云はないで下さい』

年寄の足輕はこの話を聞いて驚きかつ恐れた。忠五郎は偽のない白状をして居ると感じたが、その白状は不快な事を色々思はせた。或はこの經驗は迷ひかも知れない、禍心を有せる魔の力が起させる迷ひかも知れない。しかしもし本當に魅はかされて居るのなら、この若者は叱るよりむしろ憐むべきものであつた。それで無理に干渉がましき事をすれば却つて害になると老人は思つた。そこで足輕はやさしく答へた。

『誰にも決して云はない、——少くとも君が達者で生きて居るうちには。それでは行つてその女に會ひ給へ、しかし——用心し給へ。君は何か悪いものに魅はかされてゐはしないかと心配して居るんだ』

忠五郎は老人の忠告を聞いて微笑して、急いで去つた。數時間の後、妙に落膽した様子をして屋敷へ歸つた。『會つたかね』と老同僚はささやいた。『いいえ』忠五郎は答へた。『ゐませんでした。始めてそこにゐませんでした。もう再び私には會ひますまい。あなたにお話したのは私の誤りでした、——約束を破つたのはこの上もない愚な事でした……』相手は慰めようとしたが駄目であつた。忠五郎は倒れて、もう物を云はない。悪寒のやうに、彼は頭から足までふるひ出

した。

曉を知らせる寺の鐘が鳴り出した時、忠五郎は起き上らうとしたが、生氣もなく倒れた。たしかに病氣——助からぬ病氣になつた。漢方醫が招かれた。

『はて、この人には血がない』とその醫師は丁寧に診察してから云つた。『この人の脈管には水ばかりしかない。これはむつかしい病人だ。……まあ、なんと云ふ因業な事だらう』

忠五郎の生命を助けるためにできるだけの事はなされた——しかし駄目であつた。日暮に彼は死んだ。それから彼の老同僚はその初めからの話をした。

『ああ、私もそれを疑つて見る處であつた』醫者は叫んだ。……『どんな力もそれなら助けることはできない。その女に生命を取られたのはこの人が始めてではない』

『誰ですか、その女は、——それとも何ですか、その女と云ふのは』足輕は尋ねた、——『狐ですか』

『いや、昔からこの川に出て居るのです。若い人の血が好きなのです……』

『蛇ですか、——龍ですか』

『いや、いや、君が晝、あの橋の下で見たら實にいやな動物に見えるでせうが』

『と云ふと、どんな動物なんでせう』

『ただの藝さ、——大きな醜い墓さ』

(田部隆次譯)
The Story of Chugoro. (Kotio.)